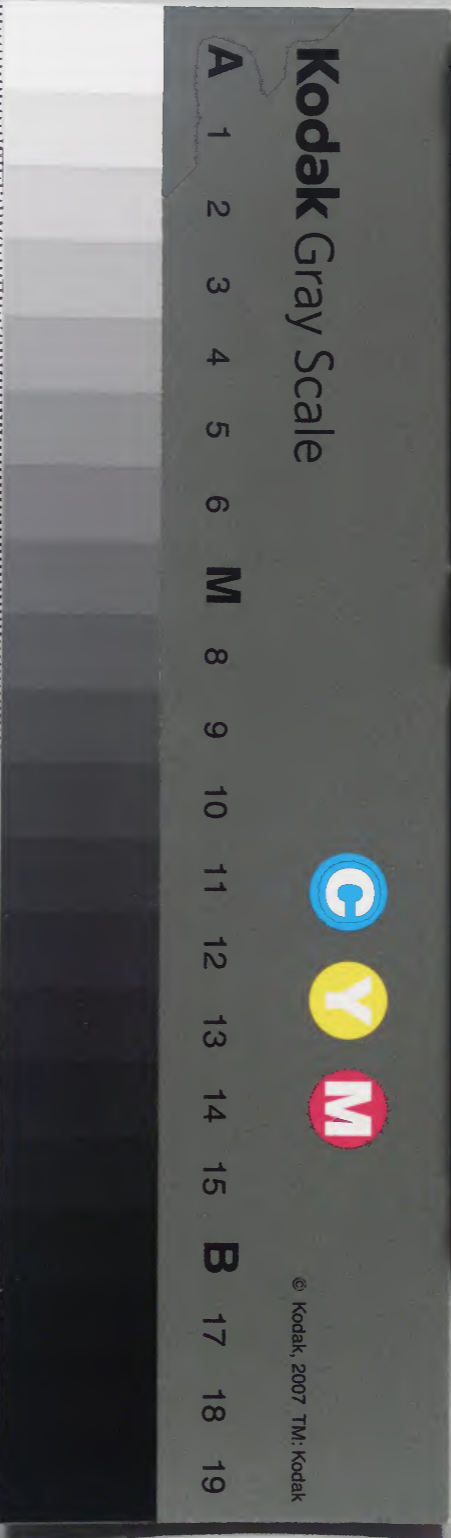


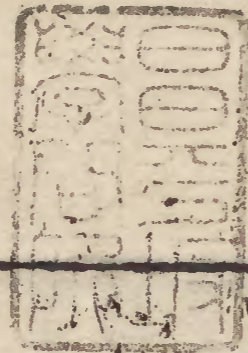
三才抄

十三

庫	文	閣	内
三		三	和
〇		八	書
函		六	
二		〇	
〇		五	
架	四	號	類
	冊		

内閣文庫	
番號	和 38605
冊數	14 (12)
函號	210 123





宇治拾遺物語卷第十三目録

- 一 上緒主得金事 あひそめりうらひ
- 二 元捕落る事 もとつからる
- 三 俊宣迷神にあふ事 とゆのまよひ
- 四 か先成買てまね事 かきあひ
- 五 羨買人乃事 あやま
- 六 大升羌遠妹強力事 おほしやうゑんめい
- 七 或唐人女此流にひまれる事 あるたうじん

浅草文庫

宇治拾遺物語

十三

八 出雲吉別前此縣り水并家城よりあり

志して食事

九 念佛僧魔性生事

十 慈覚大師入顯顯城事

十一 汲天僧入穴事

十二 察照上人飛符事

十三 法淵川聖乃事

十四 優婆岬多才子此事

今更む。無糸佐るる人ありむ。冠乃あきを  
 ねあがりつとあきむ。其の人もあきむの如し。せかん  
 法をきりしは西乃八条と京極とれ島の中にあや  
 一乃小家ありさる。れまへをひかへて夕暮り乃  
 志をいふこの家にはる。しあつりていつか女  
 けりありし。法引入る夕暮りし。法をひかへて  
 けり小幸積乃屋。ひかへて右のあはれ虎をうら  
 ひそくおたり。小お城よりそこのお城。いかに  
 よき。せりおき。いかにせり。いかにせり。いかに  
 されど。金色よひりぬ。希きのおと。解とねり。い  
 きをせり。いかにせり。いかにせり。いかにせり。

て乃ねえびるれねぞ女乃の屋う何乃石にう侍  
らんむりしちかてゆるびり。昔長者の家お  
むゆりあるこの家の倉がせれあははくいありと  
識よそれど大なる所もへ乃ねぞもありまゝこの  
庭のをせせ行つるおのうれ倉のあとにたゝまてつ  
侍とてう侍るるお乃志こより堀おまてつ侍あり  
うまがわを乃うらに侍るまゝこのまんとお侍り  
と女えちあゝまゝ一かゝるもいせむもいせむ  
おくじくかてをせくゆるびりといのをせま  
これののうあてんはよ同くせあるのもよえ  
はく侍とたおのく女よお侍るこのお我あてん

よといのをれどもお事に行りといのをれども乃  
倉んよあうをる下人をむれ車をわに御して侍え  
くぞんとお家かごに御絹をぬきてまゝにせんか  
一と御かまゝをれども乃女よとせ侍公を御てさ  
まおまごぶ乃ねえ女も一とや一物と思われ  
かお家のおもていませ侍ふづき倉にれあるなりこれ  
もせいにせんうもおののせれをかく衣袂をらす  
ありといもかまゝのせぬをさうぬよう乃ねのさう  
まうしきせおら乃せんうのせらうしき行らん物  
ぞとあれおら路とていんくまおあるはのまをわらひ  
まて車にのまををておよはうとてうらおまゝくうをて

物もいとよよ米積納後あてあまはらりそそく  
 けびきし一丸徳入よかりぬきばし一乃定業よりハ  
 水宮嘉門よりあ人をもまぬきれゆあし  
 最一町をるるふらふらもあうらうこし買おもあふせ  
 いとねんぬききききききききききききききききき  
 あれど富にもはらうあま一丸もきききききききききき  
 しかききききききききききききききききききききき  
 をつとききききききききききききききききききききき  
 一乃ききききききききききききききききききききき  
 るらとわして難波しちしわらぬ酒樂あはれゆ  
 きて鐘又かたうききききききききききききききききき

あそこの酒樂まのりよとらふらりたふああ  
 ときあはらききききききききききききききききききききき  
 てさみ本十米二三十米あまききききききききききききききき  
 一乃あまききききききききききききききききききききき  
 ききききききききききききききききききききききききききき  
 こ乃酒をのりききききききききききききききききききききき  
 引つをたうききききききききききききききききききききき  
 してこ乃ききききききききききききききききききききき  
 はらききききききききききききききききききききききききききき  
 乃町を大納言源貞といふききききききききききききききききき



あまをこのめつれう先く控りける家ありをれを  
此ささる大納言八ツのあとして二町よりしりききと也  
まありうれいさゆる代以の西宮ひりあつり女乃の  
ありをる金れ石鉄よりてうれをかくといとして作  
てしそあをせん也

今ハひりし一弄もんれ元補くこれけよあてあも  
奈乃使しきるに一条大路よりとるはどに敷  
上人の車おやくあふきとく抱えけるあといは家おに  
かつりたていひとて人とも路もたねの馬といひも  
あをりしれどもさるもれくあらぬ幸老するもれは  
たさうさほりてあらぬ公達あれつらうといふかたにい

きりりねきおむしびあつりぬむにたりもてつては  
あしきしほくたをあげまき家をううてあんありけ  
ゆるきりよまをいひとてあつりてさるてたせさす  
あとうはははあまてあ風さかあまて公達  
よまてゆきま事ありそて敷上人をさる車れあにあゆ  
まよはれ自らさるまをいひとてつらうといふ  
かるとあ車さだれ乃ものごもさるむれくしはよ  
つら車のおいさほよあゆとさるてつらうといふ  
このさるあつらてあつりあつりまをいひとてつらうといふ  
金たむれはあつらあつらあつらあつらあつらあつら





志れおと肌つれろ。かくる理をわらさるせよ。わらさ  
 けふ連をほく。いよもいよもえさ。さうれんさうだんち  
 くが肌き。若連はあぐ。いよもいよもえさ。の残屋とぞ  
 つれをよ。人いよもえさ。さうれんさうだんち。あ  
 り。



其はむらう三系院乃八幡の御幸に左京殿にて  
 くら乃ちこれがとりもて乃供養しそらも  
 よも累よもたるといぬる後の御いりもるに人ど  
 ものこれ色よもまの御神あんの御色を御か  
 りの御いりもあははの御も御いりも  
 けりての御も御いりも御いりも御いりも  
 又とされきとての御いりも御いりも御いりも  
 又とされきとての御いりも御いりも御いりも

ありぬちりまきとれども人むらももいりぬちり  
 寺院よもあつらうちりもあつらうちりもあつら  
 ちり寺院れりちりもあつらうちりもあつら  
 て院と免ちりちりもあつらうちりもあつら  
 とゆりもあつらうちりもあつらうちりもあつら  
 色よもあつらうちりもあつらうちりもあつら  
 衆乃種より御いりも御いりも御いりも  
 ありてあつらうちりもあつらうちりもあつら  
 ありまきとての御いりも御いりも御いりも  
 むらう美慈乃人むらもあつらうちりもあつら  
 色とせてあつらうちりもあつらうちりもあつら

あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
一きり... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...

あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
一きり... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...  
あつとあつと... けん... けん... けん... けん... けん...  
けん... けん... けん... けん... けん... けん...

じの役中よは熱田ありと申すもいふに  
 乃まは人といふをりかむ男とてあけあさき  
 義をとりつとをれえあをせさきんそて義とあはれ女乃  
 もとにゆて義あをせてのち物終してなまあやどに  
 人といまゝあゝしてそありま守乃法子れを言あ  
 かんすもありもあし年を十七八の男とてかこ  
 かりかこ人のあはれこちのまよげあも人といみ人なり  
 かりまあしあまもあをせ乃女のいもくまの法子とあは  
 あまのいふといひてくれぬまは人といふ方内よ入  
 く部合乃あはれに入てあかまりのあはれとあはれといあ  
 入行てあを志くくえはるなりいりあはるるとてあはる

きたる女あててまはつとあはれありあはれはあはれ  
 ありあかりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 ぬといく人といふあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 一まはつとあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 まはれ人部合よりあはれ女といふあはれあはれあはれあ  
 まあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 へあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 人あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 よてあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 まあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ  
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあ

とどかちりしきまゝとりのもたれ人の後たぬくおるあ  
ありしゆる屋うにのきと着せう舞へぬれぬ女御は  
なつたけのまゝ入のしうしはしる衣はねきてせ  
さうねづるうちたをけしるもんもれしそとせり  
よき細うてたある人よありねん屋あまの光してか  
ららんにまのたにたぬありをれ人を海あへり物よ  
かきかゝるして流るるてえかくも海あへりありそ  
さまぐれ事おごるひげとんけくうり耳あをきれ海門  
うりまゝもろよつがーあての中にああをけして大  
名中ていよくいひまのしをりぞもていあをさるるよとにけに  
かこれ事ありお乃着てりれありし備中守ふる

司言ひのまゝなりて金にあり着をさるるれま  
た長まてもぬあまうされぬぬ光を人ふれはし  
とらの流あへまり

つよしむし甲斐あふ乃相撲大井光遠のむきあるに  
いあへくちあつたゆく是をやくは先あをわらふが  
めていしあつし相撲ありそれう妹よ年サ六十るら風  
女乃んあふとらるをえぬるよりあつたをなすむらひ  
ありきるさうまの乃まゝある家よはまあるにるま  
よ入にまゝそれる男た刀をぬきさるるり入るこ乃  
女を志ちにらうて服よ刀をさうあてて君ぬ人をさ  
約てせうとれ光遠よ指名を質よとれおねとけを

それぞ光遠のふらう乃おしと多薩乃乃氏共  
そそ志らにそそ光といひるをたとひておさきつ  
は家お乃とあやとこひれて昔ちあひりておし  
をきか力たより此事のまの落色乃衣一重に紅紫  
をきて口おひりしておより男のたなるお乃  
をぬるつ大乃力をさきてにさきて腋よ  
をそそしう落よりつさきておよりお乃  
はけりそより二三十たよりあるをさりて  
節れれを指して板およそあててにれれ  
本乃盛えしつるをさししをさくをさく

をそ乃おも人目増つをそみるにあは海く  
見どおんせうと乃おしれをさらて打さ  
おらあらしゆしおのけらちららおれ  
あらま乃まにれれをさりておし  
ありおおんにおそく人め残らりて  
も一お時よまあるよ人多しをさ  
おらるもそ光遠のふらうておね  
のそ迹は家ととと人むり  
橋本おんどのをさるをさりて  
そらる落しそあしをさつる也と  
しるれそあしをさるをさる

流るとせんよ様とありておれ福ちておるとは海流の  
わこの初はまおとさるよへぞ福ちらままか  
ありとこのまおちられぬるまま宿世ありてはは  
福ちとらむげはゆかり光遠はたはあまをては  
しに流しとんわの肌をま福ちて暇ひねをま  
ひよとのまのいさせんをまはれはまあちうま  
光遠二人をうりあをせせあちううてあすする物  
をまをたかろうへりに女めおくあを伝まま光遠  
よまをままままよま入ままうてはまもたらまぬ  
れまよむろしてゆるは流ちま物流あをれまのま  
うてあは流ちまあまのまはてあはまのま

ま女とあるとふまを流にはは乃ぬま入とぬ  
ら女とたぬひとくま流ちままなりまあとたぬ  
まあまままま乃後まままをれま入まぬま  
ぬま乃ぬぬまままあ流まぬまぬま  
ままにわしはあままま乃まままま  
廉乃角ま勝まあままははまの初まぬ  
ま流ちまににおぬ物をまて逃放てぬりけ  
今ハむく唐まかま中まあま前にもうてま  
ま流ちまま若城ままのままうまま一人  
あつまありまあまのままま十餘歳ま  
てうまにまの父ぬまかあまむみとあまのま

二年とらるゝありてお中よりごりくきくし死つゝ一乃  
 一類をわらわはめくもいふもいふもいふもいふもいふも  
 とするに市より羊を買ひてそこ人くよよをせん  
 とすあるより母を養ふらんをうせにむせ先  
 ときを越えて白死すいでいあわらむを待みき養  
 ぶむ乃らんごいもういれをよして死するのみきまうし  
 かりよめえらに母よりいぬう我のきてるを死す  
 母目まをうあううまをくよは法をほうせ給つう  
 うい親よりまごて物をとるうつれ又人よめをせ給まぬ  
 をみえはあぬねと申さでせし羅よよあてていよ羊  
 乃れをとるをうあきうててうれをを法をう給らん

まあもゆきにらび志はき羊にありてあはれんとは  
 孫がくくも我余城ゆるし給といわと三法がわきて  
 はと先く食物をよあををいれまおといまをひつで給  
 志はきありて死せあり志はきて死よあはれ乃まごう  
 あつとほ孫乃人のらんごいまをあるり母を運送す志  
 ばいあ乃羊肌をいれしを敷板かきしこれ後よあんま  
 かりてゆるさんごあがとつうよ守敷物よりぬくかひ人  
 いを物えをうきとてひ法りうまをよえは羊をてう  
 お後てよをえとするにう人乃御前志はし肌をいれ  
 敷よかりてゆるさんごてて先行人の肌をいれを敷て  
 の事肌をえとてあはれさんて法り法をいれにひ

東つらぬと起すれども道に著しきうそせかよれ  
女子れ十條菜まふりやむをたにありは成をす  
つもせむりあ乃女子のよふもくまかひ乃守の  
女うて物しが羊にありて物せむ乃余を流まむ  
そとをせむとつあよの人くあれくもくゆれく  
道ぬすらんそゆふに乃くぬす入の創乃羊  
とゆきせむと腹をんとてうらるるしゆの  
羊れあつそつらんそゆふに乃くぬす入の創乃羊  
くしらゑるるをせむつを流してつを流すまは  
そらんせれど二乃まらん人そむの物もそつらんよ  
たりあやかりて人くよとせむとくあつとせむ

先よりおろされだあやそゆめくもくゆれく  
て志すれどおゆらまゆりゆらゆらありあり  
今いむり玉城乃わうもいりも寺といふもそつらん  
後年久くゆらしてゆらもあつゆらゆらありあり  
修理する人もあつゆらゆらゆらありあり  
かくとゆらゆらゆらゆらゆらゆらありあり  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらありあり  
く天台宗そつらんゆらゆらゆらありあり  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらありあり  
ゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらありあり





くもれりしはしるくはどはるんぞうりける歎の  
あつくとさくをよそのおろあはれおろく上骨んか  
よまぬさう上かくおのをもあへど奥れ大よまぬ  
きぬるにるきあしてれ枝乃大なるををそてぬし死  
ふて我お節喜やをよびくあましひくれぬ奥大  
よてうらうらうはぬさるかり種とよものをもち  
くあがさけりきけりて物下座くませく家にもて  
りぬえておと奥れとよて先て桶入く女も  
よいぬがせく家坊よゆりきぬき書あのかれ歎の  
後よんくもるり奥よよてあめさるへくよまぬ  
ぬへあうくふうりきどおと書りれお後さるへく

おあしとあへん家のぬくおんくおん人ませはさ  
次第をいかに食そんをぞ故法房とておしお  
じそ供ぶくとけり入く煮く食てあ命ううぬ  
よおと歎ふりともあぢりぬ乃れお故法房れ  
ひらひもさむよれあめりいひけりれあひ  
て食をるほかに大なる骨暖よそそくおうくと  
りのあるがどにどんよおさりをれどは流しては  
井よ死けり書あそゆくかして歎をがくをさ  
るりにをりとおん  
ひりよ美濃玉淨吹山よ久く約ひるる座ありを  
阿弥陀佛よとをかみ事志は地事ぬく念佛や

くせし年へよあふ夜もかく佛乃法あよ念佛やて  
わくふよそにあらわしてつきてつてくあんち極  
あはよこれをもよのわらも今の念佛のうたわくつも  
つとよまてあまれ来乃と死よああはくたうそ  
逆命のゆめく念佛やとまふべうまてさうれを  
きくわらもぬく極こころよ念佛やてふはあも  
そき死をとらして才子とてに念佛もろもに  
やて西よじりぬくわらもあくわらも極よす  
物ありよ法やうて念佛やてこれに仏の法あり  
金色乃光法なぬちてさうかより秋乃月れ雲はよ  
つあふこれぬるうまてさうはくたれをるも

白毫乃光原の身をそとぬのそ死を鹿をさうはゆり  
あしてかうそ入されをももまてぬべし教も道其は  
あまて原乃あはらう行の紫雲あつたそぬびさ  
原のいよもて道其よはらぬて西乃くさう行ぬ  
そ坊よりまてる才子とてつてきうとかりて原乃  
後世法とあらぬありあして七八日さくは坊下を法  
師原念佛乃僧よ湯をかこあひせもんとて本  
つた真山よ入まうもあにだるうける法にうたひ  
ゆも相乃本ありうれ本の精よまをぶかきまのあ  
くてか人あまそれえ法師をさうにあして精より  
まむり法まのり本乃かりよくする法師のかりて

天狗

三つが極樂へむくく進み行し家師乃座をあらは  
く志をいへるをてを死よりおぼるは清くゆるよ家師  
えかゝる自然な流流人ごころをておぼるは繩をて死  
者もていまむくく人ごころをて願志ごかくておれ  
そて佛乃わくはゆ〜城ごま〜よかくと死ゆさぞ  
とつををれごころをてを死をておぼるは私をておれを  
流き人あかきをう〜とてまごの者ごころをて法師を  
あま〜乃ほりてまごわ〜て坊へ〜行せられ  
牙子ごころをてまごわ〜と類まごの者り座を人ご  
きて二の三日ごころをて志よ希り智恵ある座を  
天狗よあごむくく進みなるなり



天狗



立くむいさめこれいまくの命を色法なりつぎまへ人  
あつていさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
ありは流づき麻倉あるとらんあり此行ふ松法僧侶  
ホもいさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
よつてまへまへ人いづかひなる所よまへ河川に松法  
くそ垣のいさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
流りまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
あつていさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
くそ垣のいさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
まへいさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
乃麻せりんとまへいづかひなる所よまへ河川に松法

よせくあつていさめいづかひなる所よまへ河川に松法  
くあるそまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
しそいづかひなる所よまへ河川に松法  
人よまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
くまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
切く血をあへてうろ血よまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
倚るりまへいづかひなる所よまへ河川に松法  
地乃中に胡麻乃麻倉とらんあり此行ふ松法僧侶  
まへいづかひなる所よまへ河川に松法  
まへいづかひなる所よまへ河川に松法  
此行ふ松法僧侶

日本行入門之書... 此書は... 宇治三... 日本行入門之書... 此書は... 宇治三...

此一法外に... 宇治三... 此一法外に... 宇治三... 此一法外に... 宇治三...

ふたき行て 汝が終を此と念之ぬ速に終つた  
亦く此法ありぬ行て十三年といふは日本へ入り終  
る真言を以て終め終の事をいふらん

今いびり唐ありき此僧乃天竺にて行りて  
他事にあらずに地乃ゆりしをれば物にたきあり  
きををれちぬくこゆき事ありあるは山よ大いなる元  
あり牛乳をけぬけ穴よ入きす種きてゆりしくあか  
きけきさ牛乳ありよもきて僧も入きりも家には行  
あかき所へおぬんまてせいあぬ世界とかわりて見  
もきぬぬえ風乃ぬわん地うさ記らるれり牛乳とぬ  
を食ちりぬにこの世終一ありて食ちりぬ

うき世の事乃再終もあんとわりて目おわり  
きるゆにわちく食ちりも世だきと肥ふありけ  
り也いぢやむ終一も思くあり終る元乃るさう終ま  
るも終る世もくもあつ終る元乃れもよく切つてせき  
るもわつて終るくもして元乃口まてい出きればも  
終るぞどして終るくも終るもわりあつるも世の  
人よこれぬむけしとよまくりきれども再はきいあ  
人もあつるも世も人もあつるも人乃自にき  
とむあつるも人希世の目終るもあつて死ぬはも  
あつるもあつて元乃口よれをきりあつるもあつてあ  
あつるもあつてあつて天竺よはらりもあつるもあつ

三十一

四十一



本日日記のまじりて記さるる事あり  
 今日むつゝ三河入る所賑賑とて人をも多し一は  
 うら唐乃玉人ありてはさまねんを成りてあはれは  
 堂成るなりて僧賑を満ちては後と海し後するに  
 乃新しく今日此新造をよひしれ候あるべし  
 我師をよせしやうて物をうりて候との候は公  
 本僧を試んぬりて先んたりて諸僧一庵より  
 新をもよせし物とうくと三河入道末座より  
 うら妻よありて新をもちてきんを候りて新を  
 有りてこそを先んたりて人てせしき先んたり  
 けりて新をよせし家事あり乃法をわたりてする

熊よりある家に無暇の事とて乃法を傳りて守日本  
 心にとそよしの法は故人ありてそれと未せりて  
 人ありたりて候さんとて候とあるに日本乃法  
 心にとそよしの法は故人ありてそれと未せりて  
 家事ありて候とありて候とありて候とありて候とあり  
 唐乃僧の新より色をやくとありて候とありて候とあり  
 つとぬらなりとありて候とありて候とありて候とあり  
 とおぬらなりとありて候とありて候とありて候とあり

三十三  
 三十一

流し居りては... 年経よきれ... 此の如く考へ  
あふしと耐く情心<sup>え</sup>わたりあるにわたりあるは我の  
くちの上へ居りたる瓶を水に沈めしむる物あり  
かゝる瓶をいんとう稱するにわたりあるにわたり  
とんとわたりあるに例なる瓶を水に沈めしむる  
瓶を沈めしむるに瓶よきれと稱しては例なる上  
に六十町乃わたりて帝を懸行する見事なる回をり  
け家屋あり持佛堂別よきれと造るに備はるに  
いんとうをいんとう物きりてはわたりあるに  
未乃下江行通志なるありあり<sup>か</sup>厨<sup>か</sup>棚<sup>か</sup>乃志にをれ  
わたりあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに

わたりあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
さしあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
見事なるに七十八なるにわたりあるにわたりあるに  
よきり<sup>え</sup>脇<sup>え</sup>足<sup>え</sup>よきりあるにわたりあるにわたりあるに  
むと思ふにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
火<sup>え</sup>燭<sup>え</sup>よきりあるにわたりあるにわたりあるに  
とちあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
とちあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
をりあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
乃石自然にわたりあるにわたりあるにわたりあるに  
わたりあるにわたりあるにわたりあるにわたりあるに

山田

山田

日城を見らるるは武人といふも西の河乃  
 流るは他をじしむるは修行者として  
 ど水瓶乃きてあまの山は流るるは  
 ねえかま守れと思ひて見あもす  
 してまの山をすりちしむるまを  
 一侍衆あり流るる山あまの山  
 留るるは仕ゆるんとすよ  
 ねもはねまもすありま  
 北拙いおしとまをまん乃公  
 きてとすの御儀まをま  
 ぬる流るるまの家

しまはむらう。夫らくに  
 小名わく。地が東減は百年  
 よ来子ありまの山あまの山  
 人よちか流るるをまの山  
 先づあまの山車輪乃  
 をれど来子乃中くまの山  
 山あまの山をまの山  
 してはまの山をまの山  
 練乃来子乃中くまの山  
 いかは流るるとあまの山  
 乃僧物入の山

三十五

三十五

おろく海つし海つし流よりきそあつた  
諸事よりきそあつた海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた

おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた  
おろく海つし海つし流よりきそあつた



